The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	農家の屋敷地から見たベトナムにおけるフード・セキュリティの歴史的見取り図
Author(s)	住村, 欣範
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 3, p. 95-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48373
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

農家の屋敷地から見たベトナムにおけるフード・セキュリティの歴史的見取り図

住村 欣範 大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授

「食料」と「食糧」の使い分け方：量を示す場合は「食糧」を、その他の場合は「食料」を用いた。

ベトナムのキン族は、近代化の進む今日でも人口の7割が農村に居住し農業を生業としている。キン族の農家は伝統的に自給自足性が高いとされているが、水田と共にその自給自足の中心に位置しているのが、屋敷地で行われるVAC農法（vườn：家庭果菜園、ao：自家用池、chuồng：家畜小屋）と呼ばれる複合農法である[1]。

キン族の農民の主要な生業は水稲農業であるが、農家の敷地には、それを補完するものとして、家庭果菜園、池、家畜小屋が存在する。キン族が家を建てる際、農村部では、まず、穴を掘ってその穴から出た土を盛って基礎とし、その上に家屋を建てるのが普通であった。そして、掘った穴には自然に水がたまり池になる[2]。さらに、台所のある棟に近いところに家畜小屋を建て、裏庭に果樹や野菜を植えるとVACは完成する。

VACについてのこれまでの研究では、主に「資源循環」と貧困削減に向けた「経済的有効性」の側面が注目されてきた。これに対し、本論では、「循環」と「経済」以外の側面についても考慮しつつ、屋敷地の農業生産の意味の変遷について検討し、ベトナムにおけるフード・セキュリティの変遷について歴史的考察を試みたい。

1. ラン・オンにみる「地産地消」の思想

ベトナムは、紀元前2世紀から紀元後10世紀にいたる1,000年

1　現在では村レベルで資源を循環させるVAC農業も試行されている。

2　ただし、池と家畜小屋は、VACに必須のものではない。ベトナム国立栄養研究所が2005年にBắc Giang省で行った調査結果を、筆者が集計しなおしたところ、家屋の面積の平均が50平方メートル程度であるのに対し、果菜園の面積の平均は、1,500平方メートルにも及ぶ。また、果菜園がほぼすべての世帯に備わっている（95パーセント）のに対して、池は57パーセント、家畜小屋は62パーセントの世帯が備えているに過ぎなかった。

以上もの間、中国の直接支配を受けた経験を持ち、植物利用に関する知識についても、中国からの多大な影響を受けたことは間違いない。しかし、逆に、現在のベトナムに相当する地域で産出される香辛料は、中国道教の医療的側面に不可欠のものとして認識されていたと言われており（大西 1998: 44-45）、中国から見て南方地域で産出される植物が本草学の形成に逆に影響を与えた。

11世紀になるとベトナムではキン族の王朝が中国から独立し、その後、後述する トゥエ・ティン（慧靖 Tuệ Tĩnh）が『南薬神効』（14世紀と17世紀の両説あり）（Tuệ Tĩnh 1998）、ラン・オン（懶翁 Lãn Ông）が『海上医宗心領』（1770）といった医書を著した（Lãn Ông 2005）。その過程では、「南薬」というという概念に典型的に見られるような、ベトナムの農民の生活環境に基づいた薬用・食用植物利用体系が作られていった（Hoang Bao Chau *et al.*, 1993）。また、少なくとも、ラン・オンの時代には、ベトナムにも中国の「薬食同源」とよく似た考え方が存在していたと考えられる。

このラン・オンの著書の中には、ベトナム独自の植物利用を意識した『女功勝覧（Nữ Công Thắng Lãm）』（1760年）という料理指南書がある。ラン・オンの前書きによれば、この本は、社会生活をより豊かなものにするよう、女性に対して奨励するために書かれたものであり、食品の調理法（レシピ）のほか、桑の栽培、養蚕など「女性の仕事」について記述されている。『女功勝覧』が書かれた18世紀は、朱子学がベトナムに伝わり、農村においても性別役割分業が進んだといわれる時代だけに、本書はジェンダー論の観点からも興味深い。

ラン・オンは中国医学にも造詣の深い医師であったが、常に農民の傍らにおり、身近にあって容易に入手できるものによって健康を維持することを民衆に勧め、ベトナムの農民が暮らす環境にあった、ベトナム独自の植物利用を推進した。『女功勝覧』のうち、食品の調理法についての部分には、ジャム、おこわ、菓子、豆腐などについて、152種類のレシピが書かれている。そして、それらのレシピには127種類の食材が使われており、そのうち、3種類が鉱物、8種類が動物性食品であり、残り117種類が植物性食品（うち、米を原材料とするものが3種類、小麦を原材料とするものが1種類）である。

その内訳を、現在の屋敷地で生産されている植物と比較してみると、少なくとも18世紀にはすでに、葉物野菜を除いて現在の屋敷地と同じの多くを身近な食品として用いていたことが分かる。また、『女功勝覧』では、主として植物を日持ちのする食品に加工する術が紹介されており、加工せずに日常的に用いられる葉物野菜については、はじめから同書の記述の対象になっていない可能性が高い。

この書の中で、ラン・オンは値段が高くて入手の難しい北薬（漢方薬）よりも、身近にあって容易に利用できる食材の利用をすすめている。中国産の北薬に対するベトナムの植物利用（南薬）の独自性の主張である。そして、その独自の植物利用法は、その「地」に根差したものであり、究極的には農村の家族世帯の中で認識され、育まれ、継承されていくべきものとして提示されている。今でいうところの「地産地消」に通じる思想であり、その中には、以下の節で変奏されて現れる主題、「食」と「健康」と「環境」がすでに埋め込まれているように思われるのである。

2.「VAC」の誕生

次に近代における農業生産の変化について見てみたい。1950年代後半に行われた農地改革によって、自作農が増え一時的に農業生産量は向上した。しかし、その後、集団化が進むと生産は再び停滞し、1970年代には食糧を輸入しなければならなくなっていた。さらに、この時代には、地域ごとに農地の面積の5パーセントを自留地として農民世帯に配分し、世帯の裁量で生産を行い、自由市場と呼ばれる市場でそれを販売することができたのであるが、1970年代の後半には、所得全体の3分の2、場所によっては9割が、自留地から得られていたという統計もある（吉沢 1987）。このようなフード・セキュリティの危機的な状況の中で、ベトナム政府は少なくとも3つの対策を打ち出している。

ひとつ目は、1980年代以降、農村部で本格的に実施されることになった産児制限である。ふたつ目は、家族小農経営への転換である。1981年に出された党中央政治局第100号指令によって、農業生産の個別請負制がはじめられた。これによって一時期生産は向上するが、農地の請負が短期間であること、生産物の多くを合作社への納入しなければならなかったことなどの制約があり、1980年代の後半には生産は再び停滞し、食糧不足は深刻度を増していった（図1）。このような状況を背景に、1986年にドイモイ

（刷新）が開始された。この政策によって、国営企業や合作社と並んで私的経営の発展が促進されることとなり、その方針に基づいて、1988年には、集団農業から家族小農経営への転換を内容とする党中央委員会第10号決議が行われ、翌年、ベトナムは突然世界第3位の米輸出国となった。そして、1993年に出された「農地法」によって、農民世帯の土地利用権がより明確になった。

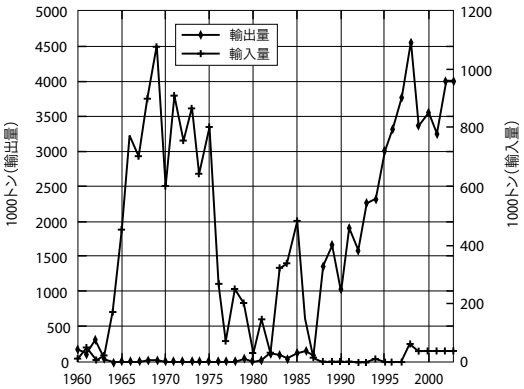

図1　輸出量と輸入量（糯米換算）

以上のような、土地と生産手段の私有化に向けた動きはよく知られているが、実はこの動きと密接に関連しながら、それと並行して、もうひとつの農業政策的な流れがあった。それが樹園地を利用した園芸農業を奨励する流れである。例えば、ドイモイ開始に先立つ1年前の1985年末には、祖国戦線と林業省の連名で「植林による森の創成と園芸経済に対する奨励」という指示[3]が出されている。この指示が出された背景には、戦争や経済的な活動のためにできた荒れ地に対する植林活動があるが、この指示の対象には、「ホーおじさんの樹園（vườn bác Hồ）[4]」と並んで、「家族の樹園（vườn gia đình）」があげられており、実質的に、合作社以外の主体が私的な農業生産を行う活動を奨励するものである。

また、果樹園地や養魚池など現在のVACを構成する要素については、第10号決議においても意欲のあるものに優先的に配分する政策がとられ、また、農地法の制定時には、他の通常の農地よりも長い貸与期間が規定されている。つまり、VACにおいて行われる農業生産では、私有の意味合いがより強調されているのである。

先に述べたように、合作社の時代においては、5パーセント自留地においてのみ自由な土地利用と生産物の利用が許されていたとされる。しかし、これ以外に、家族世帯の農業生産にとって、もうひとつ重要な土地があった。それこそが、指示に登場する「家族世帯の樹園地」であり、それは稲作がおこなわれる農地ではなく、各世帯が生活を営む屋敷地に存在していたと考えられる（図2）。

3　VIỆC TỔ CHỨC ĐỘNG VIÊN NHÂN DÂN TRỒNG CÂY GÂY RỪNG、BẢO VỆ RỪNG VÀ PHÁT TRIỂN KINH TẾ VƯỜN

4　一般には、ホー・チ・ミンがハノイで執務をとった高床式住居の近くにあった菜園を指すが、ホー・チ・ミンの教えとして、学校などで植林活動が行われていたことから、同盟の菜園が他にもある可能性がある。

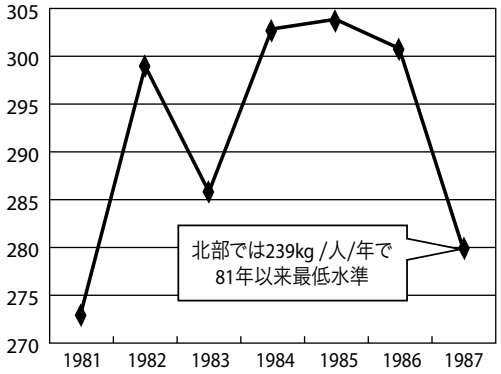

図2　一人当たりの年間消費食糧（モミ換算）
出典：Nguyễn Sinh Cúc (1995), Nông Nghiệp Việt Nam (1945-1995), Nhà Xuất Bàn Thống Kê

ところで、この屋敷地には、収入の改善とはもうひとつの期待がかけられていた。1980年に、ベトナム政府は「食事構造の改善」という研究プロジェクトを提起するとともに、ベトナム国立栄養学研究所を設立した。高名な軍医であったトゥ・ザイ（Từ Giấy）大佐が、栄養学研究所の初代院長に就任した。このトゥ・ザイ院長こそが、国民の栄養状態の改善に農業生産の面から応えるために、VAC複合農法を定式化した人物である（Từ Giấy 1993）。

VACとは、庭の野菜や果樹、池の魚、家畜小屋の豚や家禽類を組み合わせて資源循環を行う農法であり、現在では生産物を市場に売り出すことが前提となっている。しかし、栄養学の専門家であるトゥ・ザイは、むしろ自家消費をするためのシステムとして、ビタミンと動物性たんぱく質の栄養バランスのとれた食料の供給源であるVACを思い描いていたようである。この意味で、トゥ・ザイの考え方は本論のはじめに取り上げたラン・オンの視点に連なるものであると言える。

さらに、ドイモイの開始された1986年には、栄養学や農学の専門家を顧問として、ベトナム園芸協会 Hội người làm vườn（the Association of Vietnamese gardeners、略称：VACVINA）が設立された。これまでの文脈をみてもわかるように、園芸協会の設立には、当初3つの目的があった。土地の私有的利用の促進による所得向上、多様な食料源を身近に確保することによる栄養改善、荒廃した土地を回復する環境保護である（Vietnam Gardening Association 1998）。

その後の研究と施策の結果、ビタミンA不足による眼球乾燥症、たんぱく質エネルギー不足による子供の浮腫・皮膚炎、ヨード不足による甲状腺機能低下症など、ベトナムにおける栄養疫学上の課題は、大きく改善されてきた。特に、食物の生産は大幅に改善され、ドイモイ直後の1980年代末に早くも、国全体のレベル

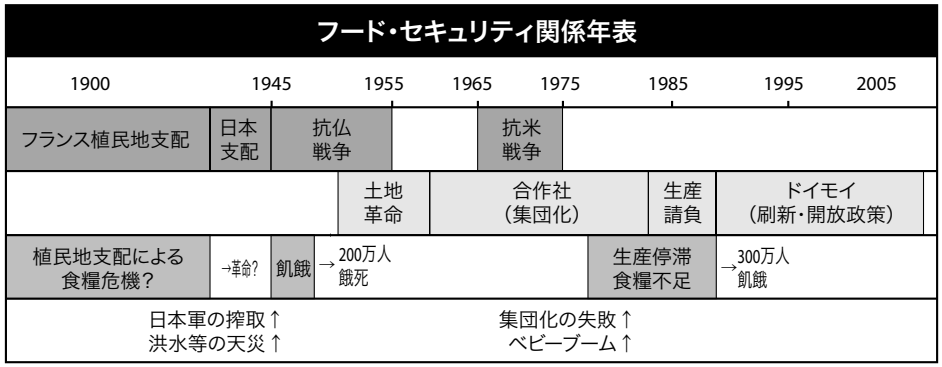

図３　20世紀以降のベトナムのフード・セキュリティ

でみれば、食物需給のバランスもほぼ問題がなくなったといえる。そして、VACについても、食糧の自給が確保され、VAC自体が国際機関からも注目されるようになる過程で、自給自足的な利用ではなく市場に向けた経済活動の活性化による所得向上の面だけが強調されるようになるのである（図3）。

3. 養生と衛生：「安全」の新たな領域へ

VACは、ドイモイ以降のベトナムにおいて急速に拡大した。屋敷地の中に、野菜と果樹、畜産がコンパクトに詰め込まれた複合農業によって、大部分の農民はVACを始めて半年から2年後には、利益を得ることができるようになった。しかし、ドイモイ以降のベトナムの農業について研究している長によれば、それは労働を度外視してはじめて利益の出る農業であり、家族経営という前提なしには成り立たない農業であるともいえる（長 2004: 124-133）。

VACでは、育てやすく栄養価の高い野菜、果物、動物性タンパク質から多様な栄養を摂取することができ、栄養失調の一部を改善した。また、VAC協会のデータによれば、VAC農法行われる多くの村で、VACからの収入が農民の全収入の50-70パーセントを占めることが明らかになった。これらのことから、VACは政府とユニセフをはじめとする国際的組織からも注目を浴びるようになった。

しかし、この過程で屋敷地の利用法は、二分化されていった。ひとつは、壮年世帯によく見られる市場向けに農業を行うVACであり、そこには、モノカルチャー化した菜園と、豚の飼育（場所によっては、養魚）が典型的に見られる。もうひとつは、働ける人のいる高齢者世帯や非農業世帯の屋敷地であり、VACの三位一体は不完全で、植物を育てる庭が中心であり、数十種類の多様な植物が植わっている。

前者の壮年世帯のVACは、ドイモイ以降のベトナム人の食の傾向を典型的に反映している。つまり、菜食の減少と、肉食の増加である。さらに言えば、これらの傾向は、ベトナムで急速に増えてきた糖尿病などの生活習慣病とも関連性があると考えられている。このような変化を背景として、ベトナムの栄養学分野の研究者たちはシンポジウムや科学的研究を行い、ベトナムの食の構造を見直す作業を始めた。

屋敷地内にVACがおかれた時の関心は、食料の欠乏をどのように改善するかということにあった。しかし、21世紀になると、欠乏が依然残っている一方で、過多やその他の問題にも関心が払われなければならなくなった。農村部では、貧困と栄養不良が解消されないままである一方、都市では食生活の変化が一因と考えられる肥満や生活習慣病が急速に増加し、21世紀に入った現在では、その現象が農村の一部階層にまで広がりを見せるようになっているのである。

この過程で、屋敷地には、再び栄養学的な観点から新たな意味が付与された。例えば、南薬を「機能性食品」として見直すというものである。筆者は2008年から、ベトナムのタイビン医科大学と共同で、「家庭菜園を利用した農村部高齢者の栄養ケアの実践とモデル構築事業」を行っている。この事業では、屋敷地内に多様な植物を育てる果菜園を復活させ、コミュニティ内での高齢者のネットワークを強化し、老人の栄養および社会関係改善を目指している。

その事業の過程で、屋敷地の農業生産に、これまでは注目されてこなかった新たな意味が見出された。筆者の調査では、果菜園を作るようになってどのくらいになるかという質問に対して、5年前後の年数を挙げる人が多くいた。上述の事業の開始に先立つこと4年であり、それに先行して同じ地域で行われていた、タイビン医科大学による栄養学的実践の開始よりもさらに早い時期に、高齢者の屋敷地で果菜園が再活性化されつつあったのである。

そして、理由を問うと、圧倒的に多かったのが「衛生」の問題で

写真1　ベトナムではじめて有機栽培の茶としてヨーロッパの認証をうけた茶畑

あった。近隣の壮年世帯の行う農業では、大量の農薬が使われるようになっている。高齢者の人々は、その危険を回避しようとして、自分たちの屋敷地で「安全な」食用植物を作ろうとしているのである。1980年代に、VACが考案されたときに存在した3つの意味、「所得」、「栄養」、「環境」に、新たに「衛生」の意味が付け加わったのだといえる。

また、ベトナムでは近年「安全野菜」という概念がよく使われるようになっている。明確な管理基準のないまま「安全野菜」は生産流通しているが、それにも関わらず、大都市の住民には好評をはくしている。その効果はどうであれ、農業の生産基盤を持たない都市の住民が、食の安全（セーフティ）を強く意識するようになっている証拠である。

2009年の夏に、筆者はベトナム一の茶の産地であるタイグエン地方で、有機栽培の茶の調査を行ったが、ここでもまた、「安全」に関心を払う生産者に出会った。筆者が訪れたタンクオン社はタイグエン地方でも最も有名なお茶の生産地である。この地域の周辺では、茶の生産加工に関するさまざまな新しい取組が行われているが、そのひとつが完全有機栽培茶の生産である。同じ、村の17世帯が集まって、完全に化学薬品を使わない生産に切り替えて3年がたって、はじめて「有機栽培」の認証を得たものである（写真1）。

興味深いのは、有機栽培農家の中核となり、化学薬品によらない除虫の方法を開発するなどした男性の話である。彼は、抗米戦争中に南部で枯葉剤を浴び、負傷兵の認定を受けて故郷に帰った。そして、普通に農薬を使う茶の生産を小規模に行っていたが、ある時、有機栽培に転換すれば一定量を買い取るという企業が現れたので、契約を結んで完全有機栽培に転換した。数軒の農家が、農薬を使って脱落する中、彼は農薬を使わない除虫法を開発するなどして、他の農家の先頭に立ち、ベトナムで初の完全無農薬茶生産をやり遂げたということである。

写真2　有機栽培のための技術改善によって賞状を授与された生産農家のリーダー

1キログラム当たりの茶の買い取り価格は高くなるものの、農薬を使わないので収量が下がってしまう。今後、耐性ができて虫がつきにくくなれば、農薬を使う場合よりも利益が上がるようになるかもしれないが、少なくとも現時点では、以前よりも収入は落ちているとのことである。それでもなお、有機栽培茶農家が無農薬茶を生産する理由は、農薬を使うと生産者自身の体に悪いからということである。ここでも、タイビンの高齢者の場合と同じく、食料の消費ではなく、食料の生産段階での安全を考える視点が芽生えているのだと考えられる（写真2）。

おわりに

ベトナムを中心に東南アジアの歴史的研究を行ってきた桜井由躬雄は、黎朝以降のベトナムにおいて、干ばつ、洪水、高潮などによる農業災害があり、そのたびに大量の流民が発生したことを、文献研究によって明らかにしている。この研究は、今なお、ベトナムのフード・セキュリティの問題を取り扱う上で必須の文献である。しかし、その論述には、ひとつ抜け落ちている点があるのではないかと思われる。農業災害について論じる際に、村落レベルでの土地利用だけに注目し、屋敷地の中で行われる私的な農業については言及していないことである（桜井 1987）。

少なくとも20世紀後半以降の状況を見ると、農村に暮らす人々のフード・セキュリティにとって、屋敷地内での農業が重要な役割を果たしていたことは間違いなさそうである。タイビンの高齢者たちがとっている戦略に見られるように、農村に暮らす人々は、屋敷地の外で行う農業と屋敷地の中で行う農業、外に対して行う農業と内に対して行う農業を区別しつつ、自らの安全を確保しようとするのである。

このような意識の芽生えは、ベトナムの他の場所でも確認できた。今後、ベトナムの農村部におけるフード・セキュリティの問題は、

国家、村落、家族の3つの軸に基づいて考察する必要があることを示している。

もうひとつの問題は、量から質への転換である。栄養の二重負荷の問題はまだ未解決なまま残されている。そういった状況の中でも、人々の求める安全は次第に量（セキュリティ）から、栄養を通って、質（セイフティ）の問題に変化しつつあるように思われる。しかしながら、問題はここで終わらない。これまで人々が対処してきたものは、農薬の問題など、可視化できるものが主であった。しかし、近年、鳥インフルエンザや、薬剤耐性菌など、VACのうち家畜に関する問題がクローズアップされるようになってきている。これらの問題は、すでに不可視の領域に入っており、当事者住民の意思だけではどうしようもない部分を持っているのである。

このことは、ベトナムのフード・セキュリティに対してこれまで大きな意味をもって存在してきた屋敷地、動物とヒトが共に暮らす周密な環境、短いサイクルの中で資源が循環する農法などを、根本から見直さなければならなくなる可能性を示しているように思われる。

引用文献

大西和彦
1998 「北属期ベトナムの産物と道教」『東方宗教』71: 44-69。

桜井由躬雄
1987 『ベトナム村落の形成：村落共有田＝コンディエン制の史的展開』東京：創文社。

長憲次
2005 『市場経済下：ベトナムの農業と農村』東京：筑波書房。

吉沢南
1987 『個（わたし）と共同性（わたしたち）：アジアの社会主義』東京：東京大学出版会。

Tu Giay
1994 'Eco-VAC systems.,' *VAC system and models of productive VAC in Vietnam*., Hanoi: Agriculture Publishing House, pp.7-15.

Vietnam Gardening Association
1998 *VAC and VACVINA*, Hanoi: VGA.

Hải Thượng Lãn Ông
1971 [1760] *Nữ Công Thắng Lãm*（『女功勝覧』）, Hà Nội: Nxb. Phụ Nữ.

Hải Thượng Lãn Ông
2005 *Hải Thượng Y Tông Tâm Lĩnh* I, II（『海上医宗心領』）, Hà Nội: Nxb. Y Học.

Hoang Bao Chau, Pho Duc Thuc, and Huu Ngoc
1993 'Overview of Vietnamege Traditional Medicine,' In *Vietnamese Traditional Medecine*, Hanoi: The Gioi Publishers.

Tuệ Tĩnh
1998 *Tuệ Tĩnh toàn tập*（『慧靖全集』）, Hà Nội: Nxb. Y Học.

Phạm Văn Hoan, Doãn Đinh Chien và CTV.
1995 Nghiên cứu an toàn lương thực thực phẩm và dinh dưỡng của các hộ gia đình tại một số vùng sinh thái khác nhau（『異なる生態環境における家族世帯のフード・セキュリティと栄養についての研究』未出版）. Báo cáo nghiệm thu đề tài cấp Bộ 1995.

Phan Văn Huân
1996 *Vai trò của VAC gia đình trong việc đa dang hóa bữa ăn tại một xã thuộc huyện Cẩm Bình – Hải Hưng*（『ハイフン省カムビン県に属するある社の食事の多様化における家族世帯VACの役割』）Luân án thạc sĩ dinh dưỡng cộng đồng.